

ホタルのニュースレター

日本ホタルの会 2004/9 第30号

キイロボタルこぼれ話

日本ホタルの会理事 小西正泰

日本のホタル類のなかで、最初に記載命名された種類はキイロボタル *Lampyris japonica* Thunberg(1784)である。この命名者C.P. ツェンペリー（ツンベルグ。1743-1828）はスウェーデン人であり、ウプサラ大学の師リネー（リンネ）の勧めにより動植物研究のため蘭館医として来日した。

彼は1775年8月13日、長崎に入港し、翌1776年12月3日、長崎から出港した。その間、長崎周辺や長崎～江戸間の動植物採集に努め、帰国後に論文や著書に発表している。ツェンペリーのヨーロッパ、アフリカ、アジア旅行(1770-79)の紀行は全4巻(スウェーデン語版1788-93)として刊行された。日本に関する記事は第3巻(1791)の全部と第4巻(1793)の前半に含まれる。第3巻は山田珠樹(1928)と高橋文(1994)により邦訳されている。

このなかにホタルにかかわる記述があるので、高橋訳から引用する。この一節はカピタンの江戸参府からの帰路、6月下旬の下関～



Carl Peter Thunberg

小倉～長崎までの道中における観察である(p.211-212)。「この間、自然の美しい光景はほとんど見られなかったが、ただ一つ、夏の夕べに飛ぶ昆虫、ホタル*Lampyris japonica*を見ることができた。それは尾に二つの袋があり、そこからヨーロッパの土蛍のように青っぽい燐光を発していた。しかし、土蛍は

羽がなくて杜松の灌木中にひっそりとしているが、この地の蛍には羽があり、自由に飛び廻っている。今や1000匹もの蛍が、あるものは地上高くまたあるものは低く空中を舞い、まるで天空にきらめく無数の星のように輝いていた」。文中の「蛍」はゲンジボタルのことであろう。「尾に二つの袋があり」は、尾端近くの発光器を指すものである。

Lampyrus japonica という学名は、この紀行において初出であろう。同じ訳書の後章（「日本の自然説」）にも「ホタル類 *Lampyrus* (*Lampyrus japonica*, *compressa*)」として2種の学名が記されている（p.317）。この *Lampyrus japonica* が“正式に”記載命名されたのは「昆虫学新種編」（1784）においてである。ただし、この1784年の種類は前記の紀行中のものとは別種であろう。

江崎悌三（1933）は、紀行中のホタルは「その記事から推すとこの種は確かに、いわゆる源氏蛍を指すもののようであるがその記載（小西註：*Lampyrus japonica* の新種記載文）と一致しないので、この点は長い間日本の蛍学者の間の問題となっていることで、今もって解決しない事実である。…前に記した日本の蛍 *Lampyrus japonica* もその記載では翅鞘の大部分が黄色なので、これも確かに Java の標本を日本の蛍と間違えて記載したのであろう」。これらの江崎の指摘は、のちに妥当なものになってくる。

ちなみに、『日本動物誌 続編』（1823）には *Lampyrus japonica* という種名がリスト・アップされているが、私の知るかぎりでは、この学名は内外の文献に再出されたことはないようである。これも“謎のホタル”であろう。

ところで、最近「日本産ホタル類のチェッ

ク・リスト」（英文。川島逸郎・鈴木浩文・佐藤正孝、2003）という労作が発表された。これによると、邦産のホタル科は44種（亜種を含む）およびオオメボタル科（旧名イリオモテボタル科）は1種ということになる。そして、問題のキイロボタル *Luciola japonica* (Thunberg) は邦産種から削除された。その根拠は、ウプサラ大学所蔵のタイプ標本の全形背面とラベルのカラー写真を入手して検討した結果、*L. japonica* は *L. chinensis* (Linné, 1767) と同種であろうということから、分布は「台湾、トンキン（北ベトナム）、カンボジア、ジャワ？、マダガスカル、喜望峰」のように整理されたためである。

ところで、このタイプ標本の写真をみると佐藤正孝（1974）のキイロボタルの写真（モノクロ）とよく似ている。後者の産地はどこであろうか。そのほか松村松年（1928）は、キイロボタルについて台湾に普通な種類であり、沖縄か台湾で採集したものを誤って「ジャポニカ」と命名したのでであろうとしている。そして、その「雌雄」の腹面の発光器周辺を図示しているが、むしろ全形背面図を図示したほうがよかったと思う。

ちなみに、台湾においてもこの種類（*Luciola japonica*）の同定は難しいのか、あるいは希少になったのかは不詳であるが、陳燦榮（1999）や何健鎔・朱建昇（2002）の台湾産ホタルの著書では、この学名と台湾名「黄燭蛍」をリスト・アップしているのみで、写真や解説はない。

そのほかキイロボタルについては古くから内外の多くの研究者が疑問を抱きながら言及しているが、今回すでに解明されたことでもあり、ここでは紹介しない。これら一連のさ

わぎの源は、ツェンペリーが九州産のゲンジボタルと外国(台湾?)産の別種のホタルに同じ学名(*Lampyrus japonica*)を使用したことによる混乱ということになるのか。

主要文献

江崎悌三(1933) Thunbergの動物学上の業績。植物及動物1:691-696。

Kawasima, I., H. Suzuki & M. Satô (2003) A Check-List of Japanese Fireflies (Coleoptera, Lampyridae and Rhagophthalmidae). Jap. J. syst. Ent. 9(2):241-261

松村松年(1928) 面白き虫界の教材、東京堂。

日本学術会議・日本植物学会(編・発行)(1953) ツェンペリー研究資料。

佐藤正孝(1974) 昆虫の世界(カラー自然ガイド12)、保育社。

高橋 文(訳)(1994) C.P. ツェンペリー江戸参府随日記(東洋文庫583)、平凡社。

山田珠樹(訳註)(1928) ツンベルグ日本紀行、異国叢書、駿南社。(仏訳本の重訳)

陳燦榮(1999) 台湾螢火虫生態導覽、田野映像出版社(台北市)。

何健鎔・朱建昇(2002) 台湾賞螢地図、晨星出版(台中市)。

下部ホタルの里観察会報告

日本ホタルの会 本多和彦

2004年6月26日日本ホタルの会と東京ホタル会議共催の観察会が、山梨県下部町において実施されました。今年も立川駅発と新宿駅発の2班に分かれて出発し、道中参加者の自己紹介などしつつ、談合坂サービスエリアで合流後、中央道を河口湖へと向うことになりました。車窓から大きな富士山を眺めながらの快適な旅続け、富士五湖を通過し、山間の道を下って下部温泉の温泉会館に到着しました。休憩後、地元のみなさんとの交流会となり、最初に下部町ホタル保存会深沢会長から下部のホタル保存活動の経緯についてお話がありました。

内容は、「下部にはかつて家に舞い込むくらいのホタルがいたが、川の汚れなどにより見られなくなった。ホタルとともにカジカガエルや魚なども多くいる地域であった。自然こそが町の財産であると考え、河川の浄化活



下部町での交流会

動を起こしたが、ちょうどその時に一色地区でホタルが発生し、下部全体でホタルを復活させようという運動になった。行政主導でホタル保存会を設立し、現在は自主的な保存会となっている。婦人会による生活雑排水の浄化、農薬散布の減少などの努力によりどこに行ってもホタルが見られるようになった。ほたる公園は下部の観光資源として温泉に付加



蛍の里案内図

価値を与えるまでになった。」という下部のホテル復活の様子を語る興味深いものでした。

続いて、蛍の里管理責任者草間さんから蛍の里づくりのお話があり、温泉郷に人工河川をつくり、伊那からカワニナをもらったこと、水温を高くするため暖かい石を入れたことなど、無から有を生み出すことの苦労をお聞かせいただきました。

最後に、下部地区前区長の石部さんのお話を聞きました。石部さんは、ホテルに感謝し、人々に感謝したいと語られ、水路を作りはじめた先見のある人、観光客の駐車場を整備した人、広報をした人、交通整理をする人など、こうした多くの人々の努力によって下部のホテルが保全されている。石部さん自身、ホテルの里に行くとまず、トイレを見、ゴミを拾うというお話が印象的でした。

続いて、日本ホテルの会矢島会長と小西理事から挨拶と感想が述べられ、その後、意見交換が行われました。多くの方から意見や感想が述べられ、交流会が終了しました。

夕食までの時間参加者は金山博物館の見学をしたり、ゆっくり温泉に浸かったりと思いいの時間を過ごし、夕食後、2台のマイクロバスに分乗し川上の蛍の里へと向かいまし

た。狭い温泉街の道を進み、人工水路の公園に着くと辺りはまだ明るく、参加者は水路の様子、カワニナが育っている様子を観察し、地元のみなさんからお話を伺いました。暫く待つうちによりやく暗くなり、あちらこちらにゲンジボタルが飛びはじめました。最盛期は過ぎたようでしたが、まばらに飛ぶ様子がまた風情があったと思います。また、気の早いヘイケボタルが混じってチカチカとかわいらしい光を放ち、浴衣姿の観光客を楽しませていました。公園駐車場脇では、日本ホテルの会の山本一彦さんが、自作の曲「里」を熱唱して下さり、参加者、観光客とも大いに感動いたしました。



熱唱する山本氏

ホテルの光に送られ、ホテルの里下部温泉を後に帰路につくこととなりました。

下部は、まちが一つになってホテルを保全し、それを地域の資産として健全に活用しています。今、都市は個性化が求められ、自治体がそれぞれ生き残りをかけて努力する時代に直面していますが、このまちは、官民が一つになって、すばらしい活動が行われている印象を持ちました。

図・書・紹・介

「虫に出会えてよかった」

矢島 稔著 フレーベル館 (1400円)

「あなたはなぜ、昆虫をしらべているのですか」と、ときどき、不思議そうに聞かれることがあります。」という書き出しで始まるこの本は、巷にたくさんみられるマニュアル本としての虫の話ではなくて、著者の「自分史」的な思いを熱く込めて書かれた本です。

この様に紹介しますと、なにか重い感じの本ではないかと誤解されそうですが、そうではありません。小学生から大人まで大変読みやすい本です。

例えば、「学校過労死」という本が書かれるほど、学ぶことの楽しさを失ってしまった日本の小中学校の子どもたちに、「実は、こんな生き方もある」「こうすれば、きみにも本物の勉強ができる」という、著者からの優しい呼びかけがあるからです。

また、今、全国各地で身近な自然を残したいと、汗水流して取り組み始めているたくさんの人々には、「自然を残す取り組みの中で、何から始めたらいいのか、何をこそやらなければならないのか、何をしてはならないのか」を、著者の豊かなフィールド体験を基に優しく語りかけているからです。

三つ目に、東京は、ここ半世紀の間に世界でもあまり例のないような、大規模な自然環境の人為的な改変を続けて来ました。そのことのつけが、現在、環境問題に深刻な影を落としています。私たちがこれから抜け出すためには、この期間に東京でいったい何があったのか、人々はそれにどう対処してきたのか判らなくては始まりません。その点について、著者の生い立ちの記と、半世紀に及ぶ虫たちとの歩みの記録は、数々の輝かしい実績と共に多くの示唆に富んでいます。是非皆さん方手にとって読んでみてください。

著者の、矢島 稔先生は、現在、群馬県立ぐんま昆虫の森園長として、東京都と群馬県を往復しながら世界に例のない昆虫の森づくりに忙しい毎日を過ごしておられます。



事務局からのお知らせ**第13回日本ホタルの会シンポジウム**

「ホタルを通じて身近な自然を考えるシンポジウム 一心なごむ自然環境を取り戻そう」
の開催

日本ホタルの会では来る2004年11月13日(土)に恒例のシンポジウムを開催します。
場所は、東京都恩賜上野動物園・動物園ホール、13時からの予定です。内容の詳細が決定
しましたらホームページ等でご案内いたします。

理事会報告

2004年7月24日に理事会が開催され、第13回シンポジウム、会費の自動振替の導入検
討、観察会会計報告などについて協議しました。

■読者投稿の募集

日本ホタルの会では、ニュースレターへの、皆様の投稿をお待ちしてい
ます。ホタル、環境保全などに関する調査、研究報告、各地域での活動報
告をはじめ、読者の皆様の体験、ホタルとの出会いなどを紹介する「私と
ホタル」のコーナーに掲載する記事を募集しています。

ご希望の方は、題名、氏名等と簡単な内容を記載して事務局あてお送り
下さい。

ホタルのニュースレター (第30号) 2004年9月30日発行

編集 日本ホタルの会事務局

発行 矢島 稔

156-0041 東京都世田谷区大原 2-17-6

ステーションプラザ代田橋 410

(株)オーグラム内 日本ホタルの会事務局

TEL & FAX : 03-3328-7379

e-mail : KYW07337@nifty.ne.jp



印刷 システム印刷株式会社

191-0031 東京都日野市高幡 1012-13

TEL : 042-591-1411 FAX : 042-591-7701